



人権作文

無意識な差別

恩田小学校 6年 木村 瑠那

「私は差別をしません。」私はそう思っています。小学校三年生のある日、母に注意されるまでは……

私が「差別」という言葉を知ったのは、小学校低学年の頃だと思います。その時は、「私は差別なんてしない。差別はゆるされない。」と思っていました。

小学校三年生のある日、私は母と兄と一緒に父が運転する車でお出かけをしていました。車内ではいつも通り家族で何気ない話をしていました。その時、運転席の後ろにいた私の席から、歩道を歩く外国人の姿が見えました。「あ、黒人の人だ。」

と私は言いました。それからしばらくして車は目的地に着きました。車から出ると母が私に「黒人って差別用語になるんだよ。」

と言いました。それまで黒人という言葉は誰でも使う言葉だと思っていました。差別的な言葉だとは思っていませんでした。なので母から注意された時、とても驚いたのを覚えています。ただ当時は今ほど差別とは何かを理解しておらず、母の言っていることがあまり分かっていませんでした。

母から言われた事が気になって学校の図書室で本を借りて読んでみることにしました。その本には、昔のアメリカではアフリカ系アメリカ人の人達が奴隷として扱われ、厳しい労働を課せられたり、親子で売り物のように売られていたりしたと書いてありました。そしてその差別を受けていたアフリカ系アメリカ人の事を肌の色から、黒人と呼んでいたと知りました。

この本を読んで私は驚きました。私は差別を自分にしていないかと思っていましたが、知らないうちに外国の方を傷つけてしまうような事を言ってしまうんだと気づかされました。

それから三年後の今年、六年生になった私は道徳の授業でキング牧師について学習しました。肌の色による差別について立ち上がり大きな運

動を起こしたアフリカ系アメリカ人の団結力の強さにおどろきました。何日も何日もあきらめず、平等になるために運動をつづけた人たちはすごいと思います。

また、社会の歴史の授業で、室町時代を学習した際に、身分差別の事を初めて知りました。その差別されていた人たちが龍安寺の石庭などの素晴らしい文化をつくり上げたことと学びました。他にも差別されていた人が多くの人々の役に立つ仕事をしていくことを知り、なぜ差別されなければいけないのかと悲しい気持ちになりました。

世の中にはいまだに様々な差別が残っていると聞いています。男女差別や、貧富の差による差別など問題はたくさんあると言われています。私のように自分は差別をしていないと思っても、知らないうちに相手を傷つけたり、差別的な言葉を言ってしまう人もいるのかもしれない。そのような人を見たり、聞いたりした時は、母のような行動を取りたいと思います。そして、少しでも差別が減るように私も意識し、日々学んでいこうと思います。

障害をもつ人にもやさしい世界を

常盤中学校 二年 上野 歩歌

皆さんは、目が見えますか。手足がついていますか。そんなのあたりまえじゃないかと思ったりもいると思います。では、そのあたりまえとは何を基準に言っているものなのでしょう。か。「障害」この言葉はおそらくほとんどの人が耳にしたことがあるでしょう。では、障害をもつ人が実際にどんな生活をしており、私たちはどのように対応していかなければならないのか考えたことはありますか。

私が初めて障害をもつ方について学んだのは小学校の授業でした。その時は視覚障害について考えるという内容で、横断歩道にいる

障害者の方への声のかけ方を考えるものでした。その時の授業では、一人が目隠しをして障害のある方の役をし、他の人が声をかけるものでした。私は障害のある役をしてみたのですが正直な感想は、とても怖かったです。一つの情報がなくなるだけでこんなに怖いのかとても驚きました。ただ立っているだけでも怖いなど思っていた時、急にトントんと肩をたたかれて心臓が止まりそうなくらい驚きました。どこから声がかかるか、ましてやどこに何があるのかもわからない状態で声をかけられると、うれしい気持ちよりも先に戸惑ってしまうなと思いました。それと同時に毎日こんなに怖い思いをしている視覚障害をもつ方はとても大変な思いをしているんだなと身を持って知りました。

この授業があつてすぐ、このような記事を見ました。「点字ブロックの上の荷物は障害者の天敵」最初は何を言っているんだと思つていましたがその記事を読んですぐにこの言葉の意味が分かりました。『もし今あなたが上空100mにいて地上に降りるには横幅30cmの長い鉄骨を渡らないといけないのだとしたらとても怖くないですか。それを頑張つてわたっている途中その鉄筋に大きな岩があつたらどう思いますか。』とても困るし、多くの人がその岩をどかさうとしますよね。これは実際にあつた出来事を障害がある方の目線で話にしたものです。この方は生まれてつき視覚障害をもつていて、いつものように駅のホームで点字ブロックを使つていた時、急に何かにぶつかったそうです。触った感じでは、キャリーケースのようだったので点字ブロックの上からずらそうとしていたとき、「おい、何勝手に触つてんだよ。」と言われました。男の人の手に触つてんだよ。」と謝り説明をしましたがなかなか納得してもらえず「ほんとに盗もうとしたんじゃないか」と泥棒扱いされ大声で罵声を浴びせられたそうです。さらにそんな状態を周りの人は見て見ぬふりをし、とても辛かつたそうです。私はこの記事を見て許せないと思いました。

明らかに悪いのは男の人のほうなのに、まるで障害者の方が悪いかのようになっていることや、その状況で周りの人が誰も助けられないなんておかし

しいと思いました。

私は障害者の方の苦勞を少しでもわかろうとネットでいろいろ調べてみました。すると支援や理解を呼びかけるような温かい記事と一緒に「障害は甘えだ。」や「理解できない。」などの心無い批判をする記事も出てきました。それを見つけた時、私は自分の目を疑いました。批判している方は障害者の方の前でも同じことが言えるでしょうか。障害は甘えなんかじゃありません。一生懸命生きている人たちにどうしてそんなことがいえるのでしょうか。私は盲導犬を使つていたりの方や白杖を使つていたりの方を何度か見たことがあります。その場には、くすくす笑う人がいました。何も面白いことなんてないのに、障害者の方を指さして笑っているのです。そんな人は、一度でもいいから障害がある方の気持ちを考えてほしいです。障害をもつていたって人間です。もし自分が道を歩いていてただで笑われたら悲しくなりません。もっと人の気持ちを考えられれば、別の行動を取ることが出来ると思います。

私は今回、主に視覚障害をもつ方について考えました。でも障害にはほかにもいろいろなのがあります。どの方もたくさん苦勞をしながら、皆さんと同じように色々なことを楽しんでいきたいと思います。その人の苦勞はその人にかわらないけれど、だからこそ、少しでも理解しようとして自分ができることを探すのが大切なのではないでしょうか。もちろん、障害者の方を批判する人は一部で、ほとんどの人が温かい心の人です。でもその一部の人が少しずつでも理解してくれる人に代わっていき、いつか障害をもつ人の気持ちを理解しようとする人があつたりまえになつていけばいいなと思います。